パンフ・1 ― 2016・秋

2016.4.24　特別企画　大野光明さんをむかえて：

「政治の再設定のために
――『安保法制反対運動』から考える」

25 時行動委員会・富山

はしがきにかえて

昨年秋から今年の春にかけて、「国会前安保法制反対運動」の在り方を巡って、わたし・たちは、何度も議論を重ね、自分・たちのスタンスを整理してきた。そうすることで、これからの運動の方向性を見出そうとしてきた。

「安保法制反対運動」の在り方は、日本の諸社会運動にとって、それをどう評価するのか、それにどのように関わるのか、それぞれがスタンスを明らかにせざるを得ないくらいに、大きなものであったことは確かである。もちろん、「今は、目の前の課題に手いっぱいで、そんなものにかかわっている暇などない」というある種健全な距離の置き方をしたものも含めて、そこには評価があったと言えるだろう。

そして、「国会前安保法制反対運動」の「主催者」側は、それを肯定的に捉える個人や運動体を、今度は参院選の統一候補擁立運動に引っ張り込み、すべてを議会内に落とし込もうとしている。こうなると、選挙結果がどうなろうと関係ない。はっきりするのは、統一候補を立てる政党のもっと左には議会内にめぼしい勢力はないし、議会の外の左翼も、存在意義を発揮することがますます困難になるということだ。この悪い流れの中で、わたし・たちにとっては、スタンスをはっきりさせ、安倍自民党政権はもとより、「統一候補」の側にも、いかに対決姿勢を鮮明に示していくかが参院選までのテーマになってくる。

そんな 2016 年の春先に、わたし・たちは、何度か来ていただいている大野光明さんにお願いし、お越しいただくことができた。「接続する反戦・平和運動へ：社会運動をめぐる言葉の現在地」という論文を書かれ、わたし・たちに近い感覚で「国会前安保法制反対運動」を捉えておられるようにお見受けした大野さんの胸を借りて、大野さんに質問しそれに答えてもらうというやり取りの中で、あるいは質問の準備をする過程で、自分・たちなりにこれまでの自分・たちの議論を整理し、これからの活動の方向性を見出すきっかけにしたいと考えた。つまり、大野さんに昨秋からのマラソンの折り返し点になってもらおうと考えたのだ。ずいぶん虫のいい話である。

大野さんにはお忙しい中、お越しいただくことを快諾していただいたこと、そしてこのような形で冊子にまとめることに協力していただいたことを、あらためて感謝申し上ます。あのとき「折り返し点」になっていただいたおかげで、緩やかにではありますが、ターニングポイントを折り返すことができそうです。

2016 年　秋

生・労働・運動ネット富山
25 時行動委員会・富山

2016.4.24　特別企画　大野光明さんを迎えて：「政治の再設定のために――『安保法制反対運動』から考える」

25時行動委員会・富山

■1　はじめに

基地問題にむきあう

大野光明です。よろしくお願いします。富山へお招きいただきお話するのはこれで3回目になります。ここに来るたびに新しいことを突きつけられ、自分の考えを深めることができました。今日もとても楽しみにしていました。お招きいただき、ありがとうございます。

私はこの10年間ほど反基地運動に関わりながら、研究を行っています。主な研究課題は社会運動の歴史、特に沖縄や京都の軍事基地問題にかかわる歴史です。研究者として調べたり書くとき、社会運動を単に研究対象として外在的に見るのではなくて、運動内部で生み出される言葉、ふるまい、リズムというような、運動のなかに入らなくては見えてこないことを内在的にとらえていくことが大事だと考えてきました。それは、自ら社会運動に参加してきたからこそのスタイルだと思います。

沖縄における基地問題とは、「沖縄の人たちの問題」ではなく、遠く離れたところに生きる私自身の問題でもある――そう考えながら活動を行ってきたのですが、2013年に自分が住んでいる京都に米軍基地建設計画がもちあがりました。予定地は京都府京丹後市にある宇川という場所です。本日の私のお話とも深く関わることですので、まず宇川での米軍基地問題についてお話させてください。

2013年2月に、安倍首相とオバマ大統領は、Xバンドレーダーという米軍の軍事レーダーを新たに日本に設置すると発表しました。住民や地元自治体には事前に何の説明もありませんでした。京都府は南北に長い自治体ですが、その北端に「平成の大合併」で新たにできた京丹後市があり、その東端の宇川という地区にレーダーが設置され、それだけでなく新たな米軍基地も建設するという計画でした。宇川は私の住んでいる京都市から自動車で3時間ぐらいかかる場所です。初めて行ったときには「とにかく遠いな」というのが率直な印象でした。宇川は半農半漁の集落で、以前は交通アクセスが悪く「陸の孤島」と呼ばれていたと聞きます。多くの住民は農業と漁業だけでは家計が成り立たないため、近隣の市街地で働いておられるようです。

基地建設予定地となったのは宇川地区のなかの袖志という部落です。予定地（約4ha）はすべて私有地ですが、その約8割が耕作放棄地となっており、残りの1～2割の土地は数軒の農家が米づくりや畑仕事などを営んでおられたようです。防衛省は地権者と借り上げ契約を結び、基地建

設が進んでいきました。2014年5月に建設工事が着工強行、同年9月には米軍の駐留が開始、翌10月に部隊が発足されるという経過をたどりました。

私は2ヶ月に一度くらいのペースで、仲間とともに宇川に通い、現地の変化を肌で感じてきました。耕作放棄地とわずかの田畑の残っていた場所は、いまではフェンスによって囲い込まれた米軍基地に変わりました。宇川の海沿いは丹後松島と呼ばれる美しい海岸線です。穴文殊という海蝕洞の上にある松林を壊して、土地を削りとる工事が行われ、いまはレーダーが設置されています。美しい場所は無残な風景に変えられていったことが、本当に悲しいですし、悔しいです。

兵士や軍属の駐留がはじまると、事件や事故が起きるのではないかと、住民は危惧していました。その予想は現実のものとなっています。駐留開始直後から軍人・軍属が関わる交通事故は多発し、米兵・軍属の運転する自動車による宇川住民に対する人身事故も起きてしまいました。米軍関係者の運転するYナンバーの自動車はスピード違反が多いのですが、警察が捕まえても、「日米地位協定」に基づき公務中のため不起訴処分となったこともあります。沖縄で起きてきたことが、そのまま京都でも起きています。

また、基地内にはレーダーを稼働するための発電機が設置されていますが、その騒音の大きさ、酷さが問題になってきました。音が煩くていらいらする、眠れないという住民が2014年の暮れから2015年前半までたくさんおられました。多くの抗議の声があがりました。それを受けて慌てた米軍は対症療法的に消音装置を取りつけ、現在、騒音の大きさは多少緩和されたように感じられます。しかし、感じ方には個人差があり、また、低周波音のような顕在化しにくい質の異なる騒音問題もあり、実態はつかめないまま、住民の不安は払拭されていません。レーダーは強力な電磁波も発していますが、健康や環境にどのような影響を与えていくのか心配されています。

米軍属の居住地問題も起こっています。宇川から自動車で30分ほどのところにある網野町島津という場所に、軍属向けの住宅地が作られることになり、昨年末に完成しました。基地問題というのは、基地が物理的に建設されさまざまな問題や被害をもたらすというだけではなく、基地の外へと広範囲にさまざまな影響を与えていく、軍隊とかかわりのある施設や事業が進出していくということなのだと実感しているところです。

スワロウカフェ

私は、「スワロウカフェ」という、沖縄や京都の基地撤去を求める運動に参加しています。京都の地元紙・京都新聞も含めて、マスメディアは宇川での基地建設問題をほとんど報道しておらず、基地の存在自体を知らない人も多いです。もっと多くの人たちに知ってもらいたい――そういう思いで「丹後フェス」というイベントをこれまでに3回行いました。地元住民の方にお越し頂き、直接お話を伺うだけでなく、宇川や丹後地方の食べ物や飲み物、音楽を楽しんでもらったり、映像上映などを通じて現地のことを知り、つながる場をつくってきました。また、屋内イベントではどうしても問題意識をもった人たちしか集まらないため、屋外でも座り込みやティーチインをやってきました。

スワロウカフェの名前の由来は「座り込み」からきています。「スワロウ」、つまり、「座ろう・座り込もう」という呼びかけと、「カフェ」のようにできれば気軽に来ることができる「座り込み」をつくろう、という思いから名前を考えました。よく「どこにお店があるんですか」と聞かれるのですが、お店はありません（笑）。スワロウカフェに集まっている仲間は、辺野古や高江での座り込みを経験するなかで、沖縄に行って闘うだけでなく、京都でも何かできないか、防衛省

の京都事務所で座り込みをやったり、デモをやってみようかと考えた。「現場」は高江や辺野古にあるのではなくて、自分たちの街も「現場」なのだと。

私が2014年に辺野古に行ったとき、キャンプシュワブのゲート前では工事車輛の出入りを止め、遅らせる活動が続いていました。京都に戻り、辺野古で学んだスタイルを自分たちなりに加工して、宇川での米軍基地建設工事に対して実践できないかという話し合いをしました。その結果、宇川の工事ゲート前で抗議のスタンディング・アピールを始めることになります。参加者は少ないので、土砂や資材を搬入するダンプカーを、辺野古のように阻止することはできません。どうしても、日々、建設工事が着々と進んでいってしまう。けれど、私たちがゲートの前に立つと、運転者はスピードを落とす。すれ違うときに、私たちは「工事をやめよう」、「さぼろう」と声をかける。それに対して、ドライバーさんは目配せや会釈で返してくれる人もいる。そのやりとりが嬉しかったし、やってよかったと思えました。そして、わずかな時間であっても工事は遅らせることができた。また、「あなたたちは歓迎されていないんだ」ということを米軍に伝え続けることができ、自動車やバイクで通る観光客にはここに米軍基地があることを伝えることもできます。小さくても意味のある活動だと思います。ある参加者は、自分の好きな音楽で抗議の意思を表現したいといって、ゲート前にアンプとギターを持ってきて演奏しています。抗議行動に、参加者それぞれが硬軟織り交ぜたスタイルを持ち込んだ点も特徴でした。

■2　安保法制反対運動をめぐって

さて、皆さんから与えられたテーマは「政治の再設定のために――『安保法制反対運動』から考える」という大きなものです。この1年ほど、自分なりに模索しながら考えてきたテーマでもあります。安保法制反対運動のなかに身をおいた自らの経験も参照しながら、政治を表現する言葉や場のありようを、少し丁寧に考えてみたい。

今日の話の流れとしては、第一に、自分が参加し、経験した安保法制反対運動のありようと問題点を整理してみます。第二に、現在の状況を考えるために、1960年代の運動を参照してみたいと思います。そして、第三に、「安保法制」において問われたはずの（にもかかわらず充分には問われなかった）基地や軍隊という装置がもつ機能を整理しながら、今後の運動のあり方について問題提起をしたいと思います。

10日ほど前に今日の主催者「25時行動委員会」から詳細な質問項目と私が書いた文章へのコメントとご批判、ご質問をいただきました（※末尾を参照）。これからの自分の研究と実践にとって、どれも大変ありがたいコメントばかりでした。すべてに十分な応答をするためには時間的余裕がなかったわけですが、それらにも答えられる範囲で答えたいです。

2−1　安保法制反対運動のありようと違和感

私は、京都や大阪で行われた反対デモや集会に参加しただけでなく、国会での最後の強行採決の日とその前日の二日間は国会前抗議行動にも参加しました。

全体的な自分の感想としては苛立つことや違和感を感じることが多かった。一つは、主催者による空間や運動のつくりかた、その主張の枠組みについて違和感を持ちました。もう一つは、反対運動の一部分を切り取って伝えている研究者やマスメディアの言説やイメージにも多くの疑問

を持ちました。

反対運動の現場には、間違いなく、人びとが確認したいこと、共有したいこと、持ち寄りたい想いや情動というものがあった。けれども、抗議空間を規定する主催者、そして運動を記述・記録するマスメディアや研究者の言説によって、人びとの思いや経験は切り縮められ、何か別なものに変えられてしまっているようにも感じました。切り縮められているものをもう一度、よりダイナミックな方向に展開できないか。困難なことかもしれないけれども、その方向性だけでも示したいという思いで書いたのが「接続する反戦・平和運動へ――社会運動をめぐる言葉の現在地」（『情況』第4期4巻第9号、2015年11月号）という文章です。この文章では、私は、自分が感じていた違和感や苛立ちを直接的に表現し、運動を批判することよりも、むしろ「もっとこういう文脈のなかで運動を考えていこう」という提案を参加者に向けてしたかった。

それでは自分が感じた違和感と苛立ちについて具体的にお話しします。

まず、抗議行動の場や空間のつくりかたに次のような違和感を感じました。国会前に到着すると、まず警官に「参加者ですか？歩行者ですか？」と声をかけられました。「なんでこんなことを警察に聞かれないといけないのか」と思いつつ歩いていると、「参加者の方は『ブース』を歩いてください」と言われます。「『ブース』って、いったいなんだろう」、「何をこの人は言っているのか」と頭のなかが「？」マークでいっぱいになって、何を言われているのかさっぱりわからなかった。けれど、歩いているうちに、どうやら抗議行動の参加者が立つ場所と歩行者が歩くところをコーンによって区切っていることに気付きます。「ブース」とは抗議行動参加者が立つべく区切られたスペースなのです。「ブース」という言葉は警察だけでなく、主催者によっても使われていました。「ブース」と「歩道」という空間的分離によって、抗議行動に参加している人たちと歩道を行き交う人たち――そのなかには「ちょっとだけ参加してみようかな」と迷っている人もいたでしょう――とを区分けする。主催者の判断と警察からの指導と管理によって、このような空間が作られていました。

また、国会前の空間をめぐって使われていた言葉に「ステージ」というものもありました。コンサートなどでしか聞いたことのない言葉ですが、国会前では「ステージにご注目ください」とか、「ステージ前が大変混雑しておりますので、分散するようお願いします」というアナウンスを主催者がよくしていました。「ステージ」とは主催者や参加者がスピーチする演台のことです。「ステージ」が設定されるということは、万単位の人が集まる抗議行動に中心を設定するということです。

その「ステージ」では、主催者がマスコミの切り取りやすいシーンや風景を一生懸命に用意していることが伺えました。「絵」になるシーンをつくるということです。若い人たちが中心になって「ヒップホップ」調のコールをやって、その傍らに国会があるという「絵」を見せる。マスコミにどのように映るかを強く意識した人たちによって空間がつくられ、運営されていたと思います。

そのこととかかわって、運動のつくり方が国会を中心にすえているのは明らかでした。国会に自分たちの声を届けようという意識が強くあり――抗議のタイミングによって意識の変容はあったかもしれないので、これは私の経験した範囲ではありますが――、国会議員を「私たち」＝国民の声を聞いてくれる主体として、参加者を声を聞いてもらう対象＝国民とする関係性が確認、反復されていました。「言うことときかせる番だ、俺たちが！」というコールは勇ましくはあるけれども、この言葉を裏切るような非対称な国会と国民との関係は追認されているような印象を受けます。「ステージ」でマイクを握っていた人たちに国会議員が非常に多かったのは象徴的です。議員のスピーチを聞かされ続けるなかで、こんなにたくさんの人が集まっているのに、なぜ参加者

がマイクを持てないのかと思った。ここは議員のコンサート会場なのか、と。議員以外の人のなかには、とても胸に響くスピーチをしていた。そういうスピーチや声をもっと聞きたいし、発したいと思う場でした。

また、「平和国家日本」という言説やイメージが、このような「コンサート会場」を覆っているようにも思えました。いままでの日本は平和であった、それがいま覆されようとしている、と。このような言説のなかでは、これまでの運動が前提としてきた、戦後日本の「平和」こそが沖縄や民族的なマイノリティ、女性、不安定労働者などへの構造的な暴力と差別をつくりだしてきたという認識を後景に退けていたように思います。「平和」をとらえかえし、戦後日本を批判的に乗り越えていこうとする運動経験と思想の系譜を、安保法正反対運動の盛り上がり自体が破壊していくようなあり方が一挙に出てきたのではないか。

そして、「コンサート会場」のような抗議空間においては、隣にいる人同士での会話や交流、議論が生まれにくくなります。みんなが「ステージ」を見ているのだから、コンサートやライブと同じです。周りにどんな人がいて、どんな思いで何をもってきているのかということには関心が向かっていかないように見えました。「ステージ」に背を向けて、居合わせた者どうしで会話したり、議論をするような、小さな輪が生まれにくいのです。

私は、抗議空間とは、参加者がそれぞれの問題意識を持ち寄り、集まったものどうしが交流するなかで、それぞれの力を生き生きと発揮していくような、ダイナミックな場であると思ってきました。特に沖縄ではそうです。主催が想定している以上の力がつくられ、国会を中心とするのではない政治が生成してくる。これに対して、安保法制反対運動、なかでも国会前での抗議空間や運動のつくられかたは――精緻に見れば魅力的な営みがあったのですが、その総体としては――、結集した多様な人びとの力が発揮しきれずに終わってしまったと思います。

2−2　分析

このような運動のつくられかたを、もう少し分析的に述べてみたい。

(1)「敷居を下げる」ことと恐怖

まず、安保法制反対運動だけでなく、福島第一原発事故後の反原発運動のなかでよく使われる言葉に「参加の敷居を下げる」というものがあります。「オシャレ」で「洗練」されたデザインのポスターやプラカード、組織を前面に出さないような場づくり（旗竿の禁止など）などによって、「一般」市民のもっている運動へのネガティブなイメージと重ならないようにすることです。こうして「敷居を下げる」ことができれば、多くの人たちの参加が得られる、参加者が増えれば力になる、そういった前提もあります。

オキュパイ運動にも参加し、影響を与えたアナキストであり研究者のデヴィッド・グレーバーの言葉をここでは参照してみたい。

> アナキストの答えはこうだ。人々を子どものように扱えば、かれらは子どものようにふるまうだろう。他者を大人のようにふるまわせるための、これまでに考案された唯一有効な方法は、かれらがすでに大人であるかのように扱うということである。（…）参加型民主主義の文化とは離れたところで育ってきた人々であっても、かれらの銃を捨てさせ、弁護士を呼ぶ能力を棄てさせるならば、ただちに十分合理的な存在になりうるということだ。（デヴィッド

・グレーバー、2015、『デモクラシー・プロジェクト』航思社、p244－245）

グレーバーは、集まる人たちをいかなる人間と想定し、どのように接するかが大切だと指摘しています。「『一般』市民は基本的に政治に無関心である。だから、運動の敷居を下げて、ポップで参加しやすい空間を作ればいい」といった考え方は短絡的なのです。運動自体が市民を子ども扱いし、脱政治化させてしまうのだから。グレーバーは、集まった人たちや道行く人たちを政治的な人間としてとらえ、「大人であるかのように扱う」ことが必要だという。もしもそのような前提のもと抗議行動、いや阻止行動がつくられれば、国会前はもう少し異なる空間になりえたのではないでしょうか。

また、「一般」市民は「政治的に無関心」という前提によって、主催者は人びとを啓蒙し、コントロールする立場を占めるようになる（これは、他のどの運動においても、しばしば陥る可能性のある態度であるとも思います）。ここには大衆の流動的な力への恐怖――何をしでかすか分からない群衆に対する恐怖とあわさった、人びとを管理したいという潜在意識――がはたらいているようにも思えました。国会前でよく覚えているのですが、あまりにも警察の規制が厳しく、人が多く集まり過ぎていたため、警察に向かって「道路をあけろ！警察帰れ！」と何人かでコールをしていたら、すぐ隣の参加者に「うるさいのよ！いまステージでしゃべっているじゃないの！」と怒られました。悔しかったので、また時間をおいてコールをつづけていたらトラメガを持ってきてくれた人がいて、「東京にもいい人がいるじゃないか！」とその人を見たら、大阪から来た友だちでした。その友人も「東京にもたまにはいいこと言うやつがいると思ったら、大野さんですか」と。嬉しいというより、悲しい。人がたくさん集まっているけど、仲間が少ない。それは「ステージ」を中心とした空間づくりに、参加者の側があわせすぎているということです。

このような空間のつくられかたによって、個人の分断も生まれます。見ず知らずの人どうしが接触し、交流することへの忌避、そこから生まれる流動的な力への恐怖のようなものがあったように思う。「ステージ」を中心とした、人びとの受動的な身体が再生産される、とても窮屈な空間に見えてしまいました。

私は二十代前半にイラク反戦運動に参加したことが、運動へ本格的にコミットするきっかけとなりました。私のこれまでの短い運動経験では、抗議行動やデモをどのようにつくるかということ自体が政治だとされてきたと思っています。デモや集会は民主主義の「実験場」なのだと。主催者や参加者が主張していることと、デモや集会のつくりかた自体は一致しているべきだということでもあります。どんなに主張が正しくても、運動のつくりかたとずれていたり、矛盾しているのはよくない。たとえば、人びとの解放を訴えながら、集会の受付やお茶汲みのような仕事を女性が中心となってやっていて、壇上でスピーチをするのは男性ばかりというのは問題だというように（もちろんそのような理念と実態には常に乖離があります）。このような運動経験――広く共有されてきた経験――からすると、安保法制反対運動、なかでも国会前の抗議行動のなかで「民主主義ってこれだ！」というコールが発せられているにもかかわらず、集会やデモを通じてこの場で「民主主義」を実践してみようという意識は希薄であったのではないでしょうか。

昨日、NHKで熊本大地震の被災者の様子が報道されていました。たくさんの支援物資は入ってくるけれども、行政がキャパオーバーになり、被災者に支援物資が届かないというのです。一つの要因は、行政が被災者や避難所を管理しているからではないかと、観ていて思いました。被災者が避難所を自律的に運営し、空間のつくりかたや支援物資の分配や輸送などについて、決めていける環境にあれば、そして、それを行政が受け入れていけば、こんな問題は起こらなかったかもしれない。阪神淡路大震災の時には、被災者による自治や避難所の自主管理が実践されていた

と聞きます。現在は、行政が主体となりノウハウやマニュアルに基づいて――それらは非常時には使い物にならない――被災者と支援者を管理する。これは一つの時代の変化を示す現象です。安保法制反対運動、特に国会前の運動のありようは、このような日本社会全体の変化をあらわす現象でもあると考えることができるかもしれない。

(2) 運動の時間をかけた鎮圧とネオリベラリズム

このような運動のありかたは、いまに始まったことではなくて、長い時間をかけて形成されてきたものなのではないかと思います。1960年代後半の反体制運動の一つのピークのなかで人びとがつくりあげていった闘いや試行錯誤の実践を、国家と資本が長い時間をかけて鎮圧してきた結果として、現在の運動に対する抑圧が登場してきているように思います。たとえば、「運動は暴力である。迷惑をかける怖いもの」という言説やイメージが、人びとの意識に深く浸透し、前提となっていること自体にそれを感じ取ることができる。自分がおかしいと感じたことについて直接行動に訴えること、つまり自らの力を行使することが、すぐさま暴力とみなされる。

また、現在の運動はまるで「消費行動」のようで、マーケティングの用語や戦略が増え、強さを増しています。これを運動へのネオリベラリズムの浸透ととらえてよいのではないか。「運動はもっと効率的であるべきだ」、「設定した目標に対して、効果的で効率的な方法をとるべきだ」など、運動をめぐり「効率性」や「効果」、「生産的」、「現実的」、「リスク」といったマネジメント用語が頻繁に使われているのが気になります。「費用対効果」で運動を評価していくという発想ですね。このような言説には、〈1968年〉的な運動を「暴れたって何も変わらなかった」、「もっと生産的で前向きな提案をすべきだった」、「運動は反対ばかりで無責任だ」というような形で否定しながら、現在主流の運動が「生産的」で「効果的」なものであるかのように都合よく歴史化していく、そのような力学があります。

また、ネオリベラリズムと大学、大学人との関係についても、安保法制反対運動は象徴的な現象であったと思います。特に人文系の学部・研究科は、ネオリベラルな大学改革のなかで「実社会に役に立たない」、「社会に意味のある教育に向けた改革を」というイデオロギーに取り囲まれている。今回の運動で、久しぶりに多くの大学教員が路上へ、運動へ参加しました。そのことは否定しませんし、もっと日常的に運動や政治にコミットするべきだと私は思っています。しかし、行動する大学人たちは大学の内部で闘ってきただろうか、と非常に冷めた目で見ている自分がいます。「自由と民主主義を！」と声をあげている学者たちは、自分の大学のなかの「自由と民主主義」を本気に守ろうとしてきたか。むしろ、それを壊してきた責任があるのではないのか。学生たちの自由な空間や時間、自治や政治を壊し、それを黙認してきたのではなかったか。そのことへの反省とともに行動した大学人を、私は安保法制反対運動のなかで出会うことができませんでした。現在の日本政府に対する批判は、形を変えて大学の現状に対する批判としてかえってくるはずです。

2−3　小さな亀裂――言語化されていないことを開く

しかし、安保法制反対運動のなかには小さな声や実践により亀裂が生まれ、わくわくするような経験も僅かではあれ、ありました。マスメディアや知識人たち、批評家たちが見ようとはしない場面や、まだ明確な形では言語化されない兆候のような出来事です。それらをきちんと言葉に残す必要もあると思います。

たとえば、国会前で「道路をあけろ！」というコールが広範囲に広がっていった瞬間がありました。強行採決の日だったと思います。あまりにも警察の規制がひどく、歩道に人があふれはじめ、息苦しさが広がり、大人だけでなく子どもも「道路をあけろ！」とコールを始めたのです。マイクがないのでみんな地声です。地声のパワーを実感する感動的な瞬間でした。すると、警察の表情がだんだん変わってきて、道路の封鎖を解除するんじゃないかという空気が漂い始める。そのとき「人権サポート」という腕章をした人――主催スタッフだと思います――が突然現れました。そして、「人権サポート」は警察を背にして私たち対面する形で間に入ってきた。しかも、マイクを持っている。一緒に「道路をあけろ！」とコールするんだろうと安易にも期待していたら、「人権サポート」は「安倍はやめろ！」とマイクでコールをしはじめた。それに対して私たちは「道路をあけろ！」と叫ぶ。すると「人権サポート」は「安倍はやめろ！」と返してくる。なんでだ？？と思っていると、「安倍はやめろ！」と叫んでいた人たちもだんだん「安倍はやめろ！」というコールになってくる。そして、最後は、みんな「安倍はやめろ！」の声に乗っ取られてしまった。空間を管理する警察と対峙できた力は雲散霧消していきました。とても悔しい出来事です。

このように、小さな形でヘゲモニー争いが起きている。「安倍はやめろ！」の声一色に塗りこめられてしまうことに負けず、それぞれの参加者の創意工夫が力をもっていけば、あの場は別の展開になったんじゃないかとふりかえります。国会前の抗議行動は主催者の管理がきついと話しましたが、細かく見ていけばそれだけではない。満足しない人たち、小さなせめぎあいを繰り返していた。

また、人びとの交流の小さな輪が生まれていたのは、「ステージ」からの「放送」がないときでした。「ステージ」で声が上がると、コンサートの時のようにそちらにみんなが顔を向けて聴いてしまう。しかし、「休息」の時や「ステージ」の運営を「総がかり行動」とSEALDsがバトンタッチするあいだの時間には、さまざまなところで「あめ食べる？」、「どこから来たの？」といった会話が始ったり、音楽演奏が行われたりする。人びとの自律的に空間をつくりだそうとする力は国会前に実は持ち込まれている。しかし、潜在的にあるだけで、顕在化していないか、しにくい環境になっている。顕在化の条件をつくれば、その力はわずかであっても現れてくるのです。

あれだけの人が集まり、不十分ではあっても路上を一時的に解放してしまった経験を共有した。直接行動の楽しさやわくわくする感じを、たとえ時間が短くとも、また、不十分であったとしても、不特定多数の人がそこで経験したのも事実です。たとえば、国会での強行採決の直前、政府は横浜での形式的な公聴会を急遽設定せざるをえなくなったのですが、法案阻止を目ざす市民が公聴会会場を取り囲むということがあった。参加者が次のように書いています。

> 規制線を張る警官の間をすりぬけて車道にでた私は、「ノーパサラン！ノーパサラン！」というコールを耳にし、横でシットインしている人に聞いた。「なんと言っているの？」「奴らを通すな！という意味みたい」反ファシズム運動のスローガンであり、C.R.A.C.の非暴力直接行動を象徴するコールであることを知らなかった私は、採決を少しでも遅らせるために二台の車を国会に行かせないことかと妙に納得して「ノーパサラン！」と唱和した。 自分のなかに不思議なエネルギーが湧き上がってきた。それは八月三〇日の国会前に集まった一〇万人の一人として、街宣車の上に乗ったいつもの有名人のスピーチからは決してえられない力だった。ウォール街を占拠した九九%、台湾の「ひまわり運動」、香港のメイン道路に座り込んだ雨傘運動が、ふと脳裏をかすめた。（遠野はるひ、2016、「怒りを共有 してつなかろう――『横浜公聴会』から見えた神奈川の市民力」『季刊ピープルズ・プラン』 71 号、p5

7）

C.R.A.Cなどヘイトスピーチへのカウンター行動への私の違和感――これまでの反体制運動に対する極端な矮小化と攻撃という看過できない傾向――についてここでは述べません。私が注目したいのは、参加者が国会前にいたときには感じなかった「不思議なエネルギー」と「力」を自分自身のなかに見出すような、生き生きとした身体の変化を経験している点です。しかも、この変化はオキュパイウォールストリート運動や台湾や香港のラディカルな占拠運動のスタイルと共鳴している点が興味深い。国会前の管理された運動とは異なる、本来の社会運動や実践が持ちうるダイナミズムの良き証言となっている。断片化され、分断されがちな個々の経験をつないでいきながら、埋もれている力を顕在化し広げていくことが、言説としても運動としてもいま必要な作業ではないかと思います。

■3　〈1968年〉のラディカリズムと現在を切り結ぶ

3-1　全共闘というスタイル

主催者からいただいたご質問のなかに、いま、「〈68年〉の運動のラディカリズムの復権や、それといかに『接続』するか」ということが大切なのではないか、と書かれていました。深く同意します。

〈68年〉的なものとは何なのかについては、その定義自体が論点であり、政治的なイデオロギーの強力にはたらく場です。ここで参照したいのは、最近、興味深く読んだ津村喬さんの『横議横行論』という本です。津村喬さんは「横議横行論」という論文で、全共闘運動はそれ以前の運動との決定的な切断として生まれたという点、そして、それを特徴付けるのは次のような全共闘のスタイルだったと強調しています。

> わが身の帰属している秩序をどれほど深く裏切ることができるか、が闘いの動機だった。いいかえれば、主体が変わることを通じて世界を変えようとした。権力をとることで世界が変わると考えてきたのが社会党－共産党からすべての新左翼党派であったとすれば、全共闘は、権力をとることこそ最も避けたい、呪うべきことであり、問題は自ら権力になることだという宣言を発した。それは文字で書かれた宣言でなく、バリケードや、さまざまな身ぶりによって、ひとつの新しいスタイルとして、都市に書きこまれた宣言だった。
>
> ひとりひとりにとって、それは身体性の発見としてあった。秩序によってからだを定義するのでなく、からだの全体性によって秩序のニセの普遍性を相対化すること。（津村喬、2016、『横議横行論』航思社、p215）

二つの点を引き出すことができます。一つは、全共闘運動では権力を取ることこそ最も避けたいことだったということ。津村は、権力を取るのではなく、自らが（権）力になることが、社会を根本的に変革することなのだと主張しています。自らのふるまいや身体、考え方、すなわち「からだの全体性」を変えるということ、そして、変わっていく者どうしが横につながることが、社会を変えるということだと。この指摘は、たとえば現在の社会運動と選挙の関係、直接行動と制

度的代表政治とのかかわりや緊張関係を考える意味で、非常に重要です。全共闘運動は社会変革のイメージを大きく変えたのです。

二点目として、新たな社会変革のイメージが「文字で書かれた宣言」ではなく「新しいスタイルとして、都市に書きこまれた宣言」であったという点にかかわります。私は、津村の文章は、言葉のラディカルさだけをもって政治をとらえるのではなく、路上や身体において表現されていることも含めて、政治の全体性をとらえようとしていると思います。現在、多くの社会学者や政治学者が〈68年〉の運動を、その表面的な言葉や行動をみて、平板に語りつづけています。あの時代の運動は過激で、暴力に傾斜した過激派によるものだったというように、矮小化がなされています。一見すると「過激」で「暴力」にみえてしまう言葉や行為の奥に、何が込められていたかを内在的に読み解こうとせず、表面的なものだけをみてしまう。このような眼差し自体のイデオロギーを、津村は当時から批判していました。

いま、津村のテクストを再読すると、〈68年〉以降の時代とは連続する反動と転向の時代でもあって、現在、〈68年〉的な政治への攻撃はやむどころか、運動のなかからも激しく行われているのだと気付くことができるでしょう。〈68年〉の運動がつくりだしていったものを徹底して管理する「装置」は次々と形成されていきました。たとえば――国会前の抗議行動のなかでマーケティング的手法が浸透していることとも大きくかかわる話ですが――、津村は教育や広告、マスメディア、そして都市空間が、〈68年〉の運動のもつ力を管理していったと分析してみせる。「こんな世界に生きたくない」、「こんな自分の暮らしは嫌だ」という人びとの脱出の願望は、新たな商品を購入し「豊かな」生活を送りたいという消費者の行動へと回収されていく。マスメディアや教育は「生活は進歩するものだ」というイデオロギーを人びとに注入する。私たちの秩序からの脱出の情動はこのようにして整序されてきた。

では、人びとの脱出の情動を、どのようにすれば社会変革へとつなげることができるのか、そのように津村は問う。1970年代以降、津村が注目していったのは全共闘運動の「敗北」や「瓦解」ではなく、その持続と転形のありようでした。「社会の進歩」や「豊かさ」を否定する反公害運動や反原発運動、管理教育を批判するオルタナティブな教育運動、住民自治を切りひらいていった各地の自律的な住民運動です。〈68年〉の運動の持続と転形のありようを、いまこそ、私たちは学びなおさなければいけないと思います。

3-2　いま、政治を考えるとき、何が大切なのか

では、これからの運動のありかたや政治をどのような点に注意して考えていけばよいでしょうか。四点、問題提起をしてみたいと思います。

（1）管理・統制の対象にならないこと

一つは、運動のなかで管理や統制の主体とならないこと、その対象を作らないことが重要だと思います。たとえば、ささやかな工夫かもしれませんが、食べ物や飲み物を持ち込む、シェアすることで、「ステージ」を中心とした空間から、それぞれの参加者の回りに小さな交流の輪をひろげられる空間へと変えることができる。国会前では食べ物や飲み物をめぐってさまざまなせめぎ合いがあったと聞いています。山谷の労働運動とその支援者たちが炊き出しをしようとしたら排除されたとか、しょうがないので調理済みのカレーライスを持ち込もうとしたら、それも警察に排除されたということを聞きました。人の集まりを管理するためには、そこで一緒に飲み食いしたり、何かを分かち合う行為を排除します。だから、私たちは集まったら、話し、食べ物や飲み

物、音楽を分かち合い、手作りのプラカード――主催者がつくったものをダウンロードして印刷したプラカードではなくて――を批評しあったり、つながることが大切です。私たちの意識を「ステージ」のマイクに向かわせるのではなく、目の前にいる人たちと自分自身がどんな関係をつくれるか。小さな話に聞こえるかもしれませんが、社会運動のもっている自律的な力を取り戻すためには大切なことだと思います。

(2) 新しさという強迫観念から解放されること

二つ目に「新しさを追求しなきゃいけない」という強迫観念から自由になることです。既にお話しした運動のマーケティング戦略ということとかかわりますが、新しいものこそ価値があるという発想自体を相対化すること。ここで冷静に考えてみましょう。新しいとされていることは本当に新しいことなのだろうか。なぜ古いとされていることがそのままではいけないのか。新しいか古いかに関係なく、自分がこうしたいと思うことをそのまま表現するのはいけないことなのか。なんで見た目やイメージに、これほどまで窮屈な思いをしないといけないのか。こういった疑問に対しては、「昔の運動は暴力的だった」→「運動は怖い」→「だから人が集まらない」＝「よって、かっこいい新しいイメージの運動を」という、ステレオタイプな答えが返ってくると思います。

ここには運動史に対する無理解が横たわっています。くりかえしになってしまいますが、このような前提において、運動経験の継承は行われず、切断がくりかえされます。現在、私たちの運動を強くしなやかにできる歴史経験を自ら捨てるようなものです。もちろん、これまで取り組まれてきたとおりに継承せよ、と言いたいのではありません。「過去」（とされる）の運動のなかに、現在でも参照可能な思想や実践がたくさんあるのだから、現在の文脈にあわせてそれぞれのやり方で加工し、翻訳することが継承だと言いたいのです。だから、新しいか古いかという二項対立は窮屈です。自分の言葉、身ぶり、表現を二項対立のなかで考えるということから自由になろう。

(3) ヨコのコミュニケーション、あるいは横議横行

三点目として、水平方向のコミュニケーションをどれだけ活性化できるかということです。津村がいうところの「横議横行」ですね。津村によれば、統治されている社会はタテ型社会であり、人びとは上下関係に基づく垂直的なコミュニケーションを取り、それを基準として生きる。会社や軍隊のような社会です。一方、社会に変革が起きるようなときというのは、いままでなかった横方向、水平方向へと人びとは自律的にコミュニケーションを勝手にとりはじめ、統治された社会は崩れていく。自律的なコミュニケーションの起点となるのは、なぜ私はこの問題に反対なのか、なぜこの社会のありようが嫌なのか、という私的な動機や思いです。自分自身の動機や問題意識を手放さず、それを表現しあえる水平方向の関係を作ることが大切だと思います。

福島第一原発事故以降、シングルイシューということが強調されています。この戦略を意識的に提起したのはベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）でした。しかし、現在いわれているシングルイシューとベ平連が意味付けたそれとは大きく異なります。ベ平連運動では「ベトナム戦争反対」に一致できるどんな人でも参加したらよいとの認識が共有されつつも、「ベトナム戦争」と連関する諸問題――たとえば、軍需産業、日米安保体制、沖縄の基地問題、反戦自衛官や反戦米兵の活動、民族差別問題、戦争責任・戦後責任の問題など――へと枝葉のように伸びていく広がりとつながりはとても重要なこととされていました。シングルイシューとは多様な運動の展開とつながりの入口であり結節点にすぎなかったのです。これに対して、近年の反原発運動や安保法

制反対運動では「それは別の問題だからこの場に持ち込まないでくれ」ということが主催者から公式に言われる（SEALDsをふくめて近年の運動がベ平連を参照しているというのですから、皮肉だなあと思いますが…）。そのような貧しいシングルイシュー論では、人びとの横のつながりは弱くなるばかりです。集まった者同士で、それぞれの経験や現場を共有するための工夫がいまとても大切だと思います。

（4）つくりたい世界に自らなること、その条件をいま・ここで表現すること（予示的政治）

四つ目に、自分たちがつくりたい世界を、未来のいつかではなく、いま・ここでつくるという考え方です。抽象的になりますが、自分たちがつくりたい世界に自分たち自身がなるということです。逆にいえば、嫌だと思う社会――権力のある社会、上下関係で決まる社会、男性中心の社会、リーダーをつくる社会…――のミニチュア版を運動のなかにつくらないということ。少なくともつくりたい世界の条件を意識的に運動の場に取り込んでいくことです。社会運動論では「予示的政治」といわれます。

鶴見良行さんがベ平連運動について次のように書いていました。

> 現代の行動者は、その遠い将来のすばらしい日のために、辛い現在を歯をくいしばって頑張っているのではなく、実は、何がしかの「夜明け」をその日その日の行動の中で味わってしまっているのだ。（…）ある意味で彼らは、すでに解放されてしまった自由な人間のようでさえある。（鶴見良行「一九七〇年とベ平連――統一についての私的覚書」『現代の眼』1969年 9月号）

また、鶴見良行がベ平連にみたものと共鳴するかのように、デヴィッド・グレーバーはこう述べています。

> 自由社会の詳細な設計図を練り上げることよりも、自由社会を見いだすことができるような条件をつくること。（グレーバー、前掲書、p228）

> われわれの行動形態そのものが、人間が自分自身をどれほど自由に組織化しうるものか、またしたがって自由な社会がどのようなものでありうるかを示す原型、あるいは少なくともそれを垣間見せるものになるべきだという理念にほかならない。（グレーバー、前掲書、p275）

人間は自由であり、社会も自由でありうる。自分の参加している場自体を、自由な人間と社会の原型を垣間見せるようなものへつくりあげていくことが大切なのです。未来のために我慢を強いるような運動はよくありません。

■4　「人びとの生存や尊厳に関わる問題」としての軍事化

4–1　差別がなければ基地・軍隊は成立しない、そして戦争も正当化できない

主催者から、拙稿「接続する反戦・平和運動へ――社会運動をめぐる言葉の現在地」をめぐって、①人びとの生存や尊厳に関わる問題（貧困問題や自殺者の問題、女性差別など）と、②社会の「軍事化」の問題とを、重ね合わせて問おうとしているけれども、両者がうまくつながっていないのではないか、というご批判をいただきました。

私は、宇川や沖縄に通うなかで、人間の生存や尊厳を踏みにじり、人びとを差別することがなければ、基地や軍隊という装置が存在できないということを確認してきました。たとえば、軍事基地は、日本社会の差別や収奪の対象となってきた土地につくられてきたのではなかったか。また、人間の生存や尊厳をないがしろにすることなしには戦争も正当化できません。ですので、私としては両者（①と②）のつながりはあたりまえの前提としていたので、ご批判の主旨がうまく理解できなかったのです。

また、仮想敵国を設定するということ、つまり、国境の向こう側の他者への憎悪や敵意をつくりだし、浸透させることなしには、日本社会の軍事化は不可能です。そして、その国民的な憎悪や敵意は、日本国内にいるマイノリティ――在日コリアンやムスリムなど――への憎悪や敵意をも同時につくりだす。さらには、基地・軍隊は男性中心主義的なものであって、性暴力を絶えず構造化する。逆にいえば社会の男性中心主義的なありようを活用して基地・軍隊は存在する。このように考えれば、基地・軍隊という装置と戦争は、差別や収奪、憎悪と敵意を国境を横断する形で作動させながら成立しています。

4-2　「認識としては正しいことが実際には運動間で共有されていない」のか？

だから、軍事問題や安全保障問題を、貧困問題や女性差別問題、民族問題などと切り離して並べてしまうような考え方には注意しなければいけません。矮小化されたシングルイシューの呼びかけを批判しなければならない理由もここにあります。そのような考え方を避けて、基地・軍隊、あるいは安保体制が含み込んでいる問題の総体をとらえることが必要です。

日本社会総体に及んでいる軍事化という視点は、これまで述べてきた悪しきシングルイシュー主義ではたしかに共有されません。「この問題とあの問題のつながりは大切だよね」、「基地に反対しているデモのなかで、女性差別の問題をアピールしてくれてありがとう」と、お互いの問題意識を共有するような、これまでの運動ではあたりまえであった場のつくりかたが、現在弱まっているという危機意識をもった方がいいだろうと思います。

しかし、たとえば、安保法制反対運動のなかで、一部の学生などが奨学金問題――その実態は学生ローン問題――を同時に訴えていました。学生たちは身近な貧困問題、経済格差、バイト先の厳しい労働環境と安保法制とをつないで考えようとしていた。経済的な困窮が自衛隊への就職へと隣り合わせの現実から言葉を発しているように思えたのですが、皆さんはどのように受け止めたでしょうか。

悪しきシングルイシュー主義のなかで切断されているようにみえて、しかし、声の行間に、空間のすきまに、つながりあうものがある。安保法制反対運動というと、国の安全保障政策（とその手続論）への怒りとして受け止められるのですが、現在の日本社会に充満している多様な怒りや痛みとどのように共鳴していたのか（いないのか）、その怒りを多様な文脈のなかで言語化し、提示することが大切な作業だと思います。

少し話がそれますが、今年3月にサンフランシスコ、バークレー、オークランドなど、アメリ

カの西海岸のカリフォルニア州に数週間滞在しました。拙著『沖縄闘争の時代1960/70』（人文書院、2016年）で書いたのですが、1960年代末から70年代の初頭にかけて、沖縄にアメリカのベトナム反戦活動家が滞在し、反戦米兵の権利擁護や活動の支援を行っていました。活動家たちはサンフランシスコに拠点を置く反戦運動団体から派遣されており、その活動について調査を進めています。サンフランシスコから橋を渡ったすぐ東側にはフリースピーチムーブメントなどの学生運動の拠点となったバークレーがあり、バークレーのすぐ南にはラディカルな黒人解放運動、ブラックパンサー党の拠点となったオークランドがあります。このエリアの1960年代から70年代の社会運動をみていくと、ベトナム戦争を一つのきっかけとして、反戦運動、エスニック・マイノリティの解放運動、学生運動、女性解放運動などが相互につながりながら、時に、厳しい対立と緊張関係を生み出しながら、渦巻いていたことがわかります。

この地域の運動経験は決して「過去」にされておらず、継承されているように感じました。サンフランシスコ州立大学では、エスニック・スタディーズ学部をターゲットとした予算削減問題が起っていました。この学部は、1968年前後、アフリカ系やアジア系などの学生と住民が中心となって、人種差別や民族差別を基礎として成立したアメリカ社会の構造を批判できていない大学自体を問い、エスニック・マイノリティ自身が学びたいことを学び、社会を変革しうるカリキュラムや体制を要求した結果、勝ち取られたものです。しかし、近年、大学にネオリベラリズムが浸透するなかで「反体制」的なこの学部は標的とされ、大学経営陣は予算カットという方針を提示したのです。現在、これに対して、10代、20代の学生たちが反対の声を上げ、集会を開き、ストライキを打ち、大学当局を交渉の場に引きずり出そうとしている。

ヒスパニック、黒人、アラブ系、フィリピンや韓国、日本といったアジアにルーツをもつ学生などが、学内集会の会場となったマルコムX広場に集まっていました。集会で話されていたのは、第一に、学生たちの先人がどのような思いでこの学部をつくり、学外のコミュニティの運動に貢献してきたのかという歴史についてでした。第二には、学部予算カットにつながると思われる国内外の問題のつらなりでありました。白人警官による黒人射殺の問題、パレスチナにおけるアメリカ帝国主義やイスラエルの軍事占領の問題、エスニック・マイノリティのコミュニティへの弾圧。アメリカという国が国内外に行使している暴力が確認されていました。

これらを受けて学生たちが発した“Many fronts, one struggle”という言葉は強く印象に残ります。私たち一人一人はいくつもの戦線に立っているけれど、それらは一つの闘争を形作っているのだ、と。“Your revolution is my revolution”という言い方もされていました。あなたの変革のための闘いは、私の変革とつながっているんだということですね。大学と学外のコミュニティ――同じ学部の卒業生たちがコミュニティの運動をつくっているのですから――の闘いを、そして現在の大学の制度をつくりだした人びとの闘争の歴史とをつなぎ合わせようという問題意識が、何度も確認される。私は参加しながら、日本の運動現場とはまったく異なる〈68年〉の継承の姿を見たように思いました。

私たちは運動現場を、多様な主体と声、歴史や経験が集まってくる一つのアリーナとして、どれだけ豊かにつくりなおせるでしょうか。結集している力を自ら管理し無力化するのではなく、また、過去と現在を切断し豊かな歴史経験を忘却・排除するのでもなく、場のもっている潜在的力を解き放つこと。このことがいま、問われていると思います。

■5　「21世紀の安保闘争」という問題提起について

最後に、この集まりの主催者からのコメントに次のようなものがありました。

「日米安保体制」それ自体を問う「21 世紀の安保闘争」にまで高めていくことが、強く求められているはずです。そのことに向けて、沖縄の辺野古や高江での新基地建設阻止運動や、各地の米軍基地反対運動、南西諸島への自衛隊配備反対運動、オスプレイ配置反対運動、米国の原潜や空母の寄港反対運動等としてこの列島上て展開されている「安保実体」に反対する諸運動をいかに相互に「接続」させるかが、大きな課題としてあるように思います。

大野さん自身が京丹後市の米軍の「Xバンドレーダー基地」に反対する取り組みを通じて「安保実体」への反対運動に関わっていらっしゃいますが、そうした「安保実体」反対運動相互の「接続」や、それらを「21 世紀の安保闘争」にまでいかに高めていくかについて、どのようにお考えでしょうか。

とても大きな問いで、私にはうまく答えることができません。

けれども、まず言えることは、第一に、「安保法制反対」を唱えれば唱えるほど、実は、軍事化が深まっているという逆説があるのではないかという点です。「『個別的自衛権』で十分対応できるのだから、『集団的自衛権』をいまさら制度化する必要などない」という言説が市民権を得てきています。「個別的自衛権」で十分であるということは、既存の日米安保体制を容認し、また、自衛隊の既に拡大された軍事的機能を追認していくことになります。状況はとても深刻です。今回の安保法正反対運動は、一部では「60年安保」、「70年安保」の闘争とならぶ「15年安保闘争」だったと表現されていますが、それは誤りです。安保法制の制度化と反対運動を契機として、日米安保と自衛隊を容認する足場固めがさらに進んでしまっている。1960年、70年に取り組まれた闘争とは位相も質も異なっているのです。この圧倒的な後退局面にあって、たしかに「21世紀の安保闘争」は必要です。

第二に、私がこのコメントを読んだときに気になったのは、「21世紀の安保闘争」とは何かという「グランドデザイン」を最初から描こうという意識をどう考えるかという点でした。先ほど紹介したグレーバーの言葉にあるように、「自由社会の詳細な設計図を練り上げること」よりも、先行する行動のなかからデザインらしきものが立ち上がっていくことを私は信頼したい。また、これまでの運動のなかで、既にそのようなデザインは描かれてきたかもしれないし、それを批判的に参照することからしか始まらないかもしれない。

そして、第三に、「21　世紀の安保闘争」なるものがあるとすれば、私は国家批判と国民批判こそが根本にすえられるべきだと考えます。国家が基地・軍隊という装置を通じて実体化させる国境線、そして、国境線によって、私たちは「国民」となり、他国民との敵対関係を生きる。このような国家がつくりあげた関係を乗り越え、それを解体するような、別の社会をつくりだしていく実践と思想が大切だと思います。先ほど触れた鶴見良行は1967年に「日本国民としての断念」という重要な論考を発表しています。いまこそ立ち返って参照されるべき文章です。

国が自衛の手段としての武力をも放棄するということは、いってみれば国家としての破産宣言なのであって、厳密にいえば、日本はあの日以来、国家ではなく、世界でもその呼称が定まっていないようなまったく新しい組織集団であったはずなのである。（鶴見良行、1967、

「日本国民としての断念――「国家」の克服をいかに平和運動へ結集するか」『別冊潮』7号）

わたくしが、国民であることを断念しようと主張する根拠はいくつかあるが、そのひとつは、終末兵器、絶対兵器としての熱核兵器が開発された現代においても、世界は依然として民族国家に分割されているが、各国国民がそれぞれの国家主権に固執するかぎり、人類は、もはや総体としてこの時代を生きのびられないのではないかという観察である。その二は、第一の観察結果と歴史的、社会的に関連する事柄であるが、高度に機械化され緊密に組織化された国家社会の内部において、多くの人びとが人間的に疎外された生活をすごしているという観察である。こうした状況を克服し、わたくし自身の生を回復する原理として、わたくしは反権力の運動としての平和運動を考える。

主権国家という機構にたいして国民という成員がある以上、平和運動は当然、国民としての立場を否定するものをふくんでいなければならないだろう。（鶴見良行、同上）

国民であるということ――あるいは、基地・軍隊という装置を通じて国民になるということ――は、常に非国民を設定し、戦争を前提とする。基地・軍隊とは、私たちの社会を潜在的な戦争状態へ導き続ける装置です。つながりあえる者どうしを、国境線や国籍によってばらばらにし、相互の敵意を植えつけていく。そのような政治では「もはや総体としてこの時代を生きのびられない」――この実感はますます強まるばかりではないでしょうか。国家がつくる政治、そのもとで内面化している国民としての生を拒否すること、国家の用意するゲームを降りることが大切なのであって、「21世紀の安保闘争」を考えるのなら、このような哲学を基礎としなければ根本的に闘うことはできないと思います。

だから、私たちが議論するべきなのは、米軍への協力範囲をどこまでにとどめるのかではなく、自衛隊の機能を再定義することでもないのです。私たちが「21世紀の安保闘争」として切りひらいていくべきは、国家と国民を批判した先にある、現在とは異なる政治のありようなのです。

▼25時行動委員会・富山「富山でお話しいただきたいことのポイントについて」（2016年4月12日）

大野さんが「情況」誌で発表した「接続する反戦・平和運動へ」の論文をめぐって、先日論議する場をもちました。

その論文の前半で、大野さんが、安倍の「安保法制」攻撃を戦後日本国家に累積されてきた「社会の『軍事化』」という大きな歴史的な視点で捉え返そうとしていること、また、その後半では、そうした論点に立って、「安保法案反対運動」がどのようなものであったかを論じようとしていることに対して、私・たちとして異論はありません。

ただ、論文の前半で、大野さんが安倍の「安保法制」攻撃をそうした大きな視点から捉えようとしていることに立てば、その後半では、「安保法案反対運動」は運動として何を最大限目指すべきものであり、運動がどのように組み立てられるべきであったか、また、そうしたことに照らして実際の運動のあり方を見る際にどのような課題や問題点が浮かび上がってくるかについて、さらに詳しく論じられてもよかったように思います。そのように、私・たちとして大野さんの論文で充分に論議が尽くされていないと感じていることを、以下の３つの論点として整理しました。それらも含めて、ぜひ、富山でお話しいただければ、と思います。

（中略）

１．軍事・「安全保障」問題と「人々の生存や尊厳に関わる問題」をいかに「接続」するか

大野さんの論文の前半では、第一に、戦後日本社会が一貫して戦争とともにあり、戦争の下で「平和」や「経済発展」を享受してきたこと、第二に、日本の「平和」は沖縄に「日米安保体制」の負担や矛盾を押し付けることで可能になったものであること、第三に、貧困・差別の問題や年間約３万人にも及ぶ自殺者といった「この日本社会が問題を先送りにしてきた人々の生存や尊厳に関わる問題や矛盾」の存在の３つを挙げて、「平和国家ニッポン」の欺瞞を鋭く批判しています。そうした論点に立って、さらにその後の部分では、「社会の『軍事化』」という視点から、社会に埋め込まれた「基地・軍隊」の存在が、私・たちが「生」を営む場としての社会をその根底からいかに脅かしているかについて、詳述されています。

そのように、大野さんが、「社会の『軍事化』」を論じていることは、「平和国家ニッポン」の欺瞞について言っている最初の２つのことにはそのまま当てはまるように思います。ただ、「人々の生存や尊厳に関わる問題や矛盾」までも含めて「社会の『軍事化』」として捉えることは、やや無理がありますし、それとは別の捉え方が必要なように思います。

大野さんの論文では、差別や貧困、女性問題といった、安全保障や基地問題のような軍事の問題と別々に語られがちな社会問題が、「基地・軍隊を結節点として結びつく」とあります。それは認識としては全く正しいとは思いますが、そのように認識としては正しいことが実際には運動間で共有されていないという現状をどこで打開するか、ということがあるはずです。
そのことから言っても、「安保法制」のような軍事・「安全保障」に関わる問題と、「人々の生存や尊厳に関わる問題や矛盾」をさらに深く重ね併せて考えることが必要なように思いますが、大野さんは、その２つを重ね合わせて捉える際にどのようにそれを呼ぶことがふさわしいとお考えですか。

また、そうした軍事・「安全保障」に関わる問題と、この日本社会の中に構造化された「人々の生存や尊厳に関わる問題」が運動間で「接続」されるには、何が必要だとお考えですか。

２．「安保法案反対運動」の現場は「占拠空間」たり得えていたか

大野さんの論文では、「秩序正しい」抗議行動への協力を求める警察に参加者が「協力しません」と言い返したことや、国会議員のスピーチにうんざりして「あんたたちのスピーチを聞きにここにきてるんじゃない」というつぶやき等、運動現場での「自立的な実践と多様なふるまい」について言及されています。

そうしたシールズを軸にした「安保法案反対運動」の語り方では触れられることのない参加者の微細な「抵抗」に着目して、そこから運動の可能性を見いだそうとする大野さんの視線は、とても貴重なもののように思います。しかし、そのことは、そうした運動の参加者の「多様なふるまい」や「つぶやき」にきちんと向き合うことなく、「周辺」に押しとどめてしまうような運動の抑圧的なあり方を批判することと対になるべきではないでしょうか。

そのような意味で、先に述べたように、大野さんが論文の前半で述べているような大きな論点に立って、「安保法案反対運動」は運動としてどのように組み立てられるべきであったかという視点から、実際の運動現場のあり方をきちんと検証することが必要なように思います。また、大野さんは、「安保法案反対運動」を辺野古や高江といった各地の「占拠空間」と重ね合わせて論じていますが、そうしたことで言えば、「安保法案反対運動」が「占拠空間」としてどれだけの内実をもっていたか、さらに言えば、それが「占拠空間」として「ダイナミズム」を生みだすことを何

が妨げていたかが、問われているように思います。

大野さんの論文でも、「安保法案反対運動」について、「ある種の解放感があるようにみえて、どこか息苦しい空間が広がっていた」といった批判がされていますが、やはり筆を抑えた、ひかえめな言い方をしているように感じます。メールと一緒に送っていただいた「週刊読書人」の「論潮」に、「安保法案反対運動」をめぐる論議で「全共闘運動」が否定的に言及されているという指摘がありますが、そうした「秩序指向」で自己規制的な運動のあり方と「全共闘運動」のような〈68年〉の運動のラディカリズムの否認とは、深く通底しているのではないでしょうか。

そうであれば、なおさら、当日は、〈68年〉の運動のラディカリズムの復権や、それといかに「接続」するかということも含めて、以上、述べたような視点から、今回の「安保法案反対運動」の運動現場のあり方への批判や、そこから浮かび上がってくる運動の課題・問題点をめぐって、ぜひ、大野さんに忌憚なく思うところを語っていただければ、と思います。

３．「21世紀の安保闘争」へ向けて「安保実体」反対運動を相互にいかに「接続」するか

最大で10万人超の参加者が国会前の街頭に結集したデモ・抗議行動について、「2015年の安保闘争」と呼ぶ論者もいます。しかし、残念ながら、それは、「安保法案」の成立の阻止を目指す「『安保法案』反対運動」ではあっても、「安保法制」の成立によってさらに深化するであろう「日米安保体制」そのものを問う運動ではなかったように思います。

そのように、私・たちが、「安保法制」に反対するということを本当に突きつめようとするならば、そのことを「日米安保体制」それ自体を問う「21世紀の安保闘争」にまで高めていくことが、強く求められているはずです。そのことに向けて、沖縄の辺野古や高江での新基地建設阻止運動や、各地の米軍基地反対運動、南西諸島への自衛隊配備反対運動、オスプレイ配置反対運動、米国の原潜や空母の寄港反対運動等としてこの列島上で展開されている「安保実体」に反対する諸運動をいかに相互に「接続」させるかが、大きな課題としてあるように思います。

大野さん自身が京丹後市の米軍の「Xバンドレーダー基地」に反対する取り組みを通じて「安保実体」への反対運動に関わっていらっしゃいますが、そうした「安保実体」反対運動相互の「接続」や、それらを「21世紀の安保闘争」にまでいかに高めていくかについて、どのようにお考えでしょうか。

私・たちは昨秋からの「折り返し点」を どう曲がろうとしたのか

―　大野光明さんをお迎えする場を持つことを契機に、「国会前安保法制反対闘争」に対する自分たちのスタンスを整理し、これからの活動の方向性を見出す　―

1．2016年４月６日、大野さんの論文を巡って話し合う

大野さんの「接続する反戦・平和運動へ：社会運動をめぐる言葉の現在地」という論文の論点を整理し、大野さんへ質問することを考えてみることを通して、昨年の「国会前安保法制反対闘争」に対する自分たちのスタンスと、今後の運動の方向性を確認するための話し合いを持った。

2．大野さんの論文に対する疑問、批判点として出されたこと

①　「安保、基地、差別、貧困、女性、格差など別々に語られる社会問題は、基地・軍隊を結節点として結びつく」―大野さんが京都府京丹後市経ヶ岬の米軍「Xバンドレーダー」基地反対運動に取り組み、その取り組みの中から、戦後70年の日本社会をそのように捉えたいと考えることは理解できる。その取り組みを主語にするのなら、「結節点」にすべく奮闘していることは理解できるし、好感も持てる。

　しかし、戦後70年の日本社会を主語にするのならば、残念ながら現状ではそうはなっていない。日本の諸運動は現状、基地・軍隊を運動の結節点にまで押し上げてはいない。だから「これら接続する運動の蓄積の上に安保法制反対運動があることを確認しておく」というのは、そうであるはずだ／そうであってほしいという大野さんの言わば「願望」である。「結節点」になっていないからこそ、未だに「別々」であるように「語られ」ているのではないか。そこをレトリックで滑らかに接合しようとしてはならないのではないか。

②　本論文は、前半で「日本社会の軍事化」という現状の把握の仕方をし、明らかにそこから戦略を立てるべきであるという論の進め方をしていながら、戦略の話は捨象されて、後半は、ほぼ「占拠」という戦術が開く可能性に絞って展開されているに等しく、前半に後半が対応していないのではないか。別の言い方をすれば、二つの間が抜け落ちている。つまり「戦後日本社会の現状認識」と「現場の話」の間に運動の組み立て方の話が抜け落ちている。そこをどう考えるか。

③　今回の「国会前」はエジプトやスペイン、ウォール街、雨傘革命、太陽花革命らに連なる「占拠」といえるのか？日本のものでも、「大飯原発ゲート前」にはそこを封鎖するという物理的具体的目標があり、「官邸前」には、中に明らかな敵がいた。しかし「国会前」に詰めるのはどのような意味があるのか。その行為が門前を「占拠」したとは言えないのでは。国会の中で重要なことが決められて、その様子を野党議員を通して聴いているという構図は、はたして「占拠」なのだろうか？

④　「総がかり」という組立て方の枠内で集まっているから、アッセンブリーは起こり得なかった。むしろその運動の組み立て方のところを問題にすべきではないか。60年安保で言えば「安保阻止国民会議」があったが、それを飛び越えて人々が溢れ出した。当時から「社共に代わる政治勢力を」と言ってきたが、ついに今回もそれが現れなかった。その運動の組み立て方のことに論者はみな触れなさすぎる。戦略を論じずに「戦術をもっと問題にすべき」というグレーバーや酒井隆史さんにもほぼ同じ批判がある。

⑤　「総がかり」のさらに左の旗を示せなかった。示せなかったのが戦略レベルでの失敗ではないか。「総がかり」の左には何があったのか。つまり、現存する反戦・平和運動との接続ができているかどうかではなく、「格差、貧困、民族差別、性差別、障害者差別、戦争責任未追及、自殺者・・・これらを引き起こす、日本社会に構造的に埋め込まれ、維持されてきた暴力」に対する反撃としてどこまで運動が組まれているのか、仕組まれた枠をどこまで左側に超えられたのかということが、問題だったのではないか。

⑥　「国会前安保法制反対闘争」では、武藤一羊さんの唱える「憲法・平和主義原理」構築への議論が正面から据えられなかった。集団的自衛権を認めた新安保法制への反対をこれだけ多くのものが唱えるのならば、憲法9条2項がありながら、自衛隊があり、日米安保条約のもと米軍がある等、これまでの「安保実態」を疑問視し、批判する広範な議論がなされ、憲法・平和主義をもう一度しっかりと戦後日本国家の構成原理として据え直そうという機運が高まってもよかった。

しかし、「国会前安保法制反対闘争」の反対理由は、集団的自衛権がほとんどの憲法学者が認めている明確な違憲のものであるということ、内閣の閣議決定により憲法に反しないとして国会審議にかけ、数の論理で強引に採決、成立させるという、いわば政治手法が強引すぎたことの２点にほぼとどまったと言える。その後も先鋭化されることはなかった。いや先鋭化どころか、集団的自衛権は認めたくないが、自衛隊や米軍駐留、個別的自衛権まではこの際認めることで整合性を高めようという雰囲気が、さして議論がないままに出来上がりつつある。

さらに「国会前安保法制反対闘争」の大きな問題点は、「賢い国民」がよりよき政府を選択するという発想に収斂していくことである。「民主主義はここだ」「国民なめんな」は、ナショナルデモクラシーへの収斂であり、これがネイションを超えた「憲法・平和主義原理」を国家の構成原理として根付かせるという構想を阻んでいる。同時に、これが、法案成立を許した後も負けを認めず、参院選の野党共闘へと流し込む、多様性を認めない硬直した流れを全国的にばらまいている元凶ではないか。

ここが「総がかり」という組み立て方の限界であり、ここを突破しない限り、シールズが「ここにある」といった「民主主義」は、国民主義を超えられず、議会内民主主義に収斂する。そして、それ以外の多様性は国家権力によってどれも排除の対象になる。この問題をどうするのか。

３．大野さんの論文への批判を踏まえて整理された自分たちのスタンス

２０１５年９月の同時期にあった二つの場所―クライマックスを迎えようとしていた「国会前安保法制反対運動」の路上と熊谷でちょうどそのころ短期間に６人を殺害した日系ペルー人がさまよっていた街頭―二つの間に途方もない距離を感じざるを得ない。その途方もない距離感はどこから来るのか。大づかみに構図化してとらえるならば、それはこれらの限界からくるのではな

いか。

① 「平和と民主主義を守る」政治ＶＳ「憲法・平和主義原理」による「安保体制」打倒の政治

それは、「９条を守る」「平和憲法を守る」「平和に過ごしてきた戦後７０年を守る」という政治＝「平和と民主主義を守る」政治の限界からくるのではないか。この政治は、アジアの人々と共に日本国家の構成原理を「憲法・平和主義原理」に定め、新安保体制のみならず、これまで続いた安保体制／安保実態をも徹底的に廃棄するような政治にとってかわられなければならなかった。

② 「ナショナル・デモクラシー」の政治ＶＳ〈列島社会住民〉の政治

「総がかり」として「国民運動」を自称した運動が中心であったことから明らかなように、それは「ナショナル・デモクラシー」の国民主義的な限界からくるのではないか。シールズが安倍政権に対して発したフレーズ＝「国民なめるな」は、列島社会に生きるアジア出自の人々、特に敗戦後すぐに天皇の勅旨により歴史的に「国民」から排除された人々にとっては恐怖を感じる言葉である。(「自由と人権は「国民」の専有物ではないと考えるひとびとのブログ」参照)「国民」の政治ではなく、多様な未成の〈列島社会住民〉の政治にとってかわられなければならなかった。

③ 「共和主義」の政治ＶＳ「社会的なもの」の再＝構成の要求に依拠する政治

それは、一人一人の生の困難を集約し、社会的平面からせり上がり突き出された政治表現であったといえるのか。自分自身の生に直結するリアリティからというよりも、どこか「共和主義」的な、社会的内実を伴わない「『空虚なシニフィアン』的運動」（広瀬純）がつくり出す政治の限界からくるのではないか。その「共和主義」の政治は、「社会的なもの」の再＝構成の要求に依拠する政治にやがてとってかわられなければならなかったのではないか。

④ 「立憲制・民主主義」擁護の政治ＶＳ〈問い〉を拓く「直接性」・叛乱の政治

それは、「立憲制・民主主義を守れ」という一点で足並みをそろえ、それ以外の政治的立場の違いをあらかじめ不問に伏すという政治ではなかったか。それでは、立場の違いを表立って表明できない硬直した関係に留まる。つまり、主催者の意向に沿って、主催者以外は単なる「参加者」として遇される構造がたちまちでき上がってしまう。「総がかり」運動の硬直性は、始めから明らかであり、「国会前」の空間は、参加者同士の議論や主催者への批判的言説を排除した「無菌状態」を保つように腐心されていたのである。

しかし、その主催者の思惑を超えて「直接性」・叛乱の政治がその場で展開されるべきではなかったか。それは、運動の組み立て方の問題であり、「主催者」の硬直性の問題であると言えるが、逆に言えば一番の問題は、自分たちも含めて、集まった者一人一人の意識の限界だったのではないか。

台湾の太陽花革命のような「国会突入」は試みられなかった。国会の外で「国会内の状況を野党議員を通して知る―野党議員にエールを送る」という運動のスタンスを壊して、「議員はみんな替われ、自分たちこそが国会だ。中へ入るぞ」とは言わなかった。

「あらゆる犯罪は革命的である (平岡 正明1972年)」 ― ペルー人は日本社会での生き難さをこのような形で表現せざるを得なかったのだが、それに対応するだけの生きがたさの表現がはたして「国会前」にはあったのだろうか。

４．大野さんへの「問い」をつくる

4月6日の議論を経て、大野光明さんへの「問い」を、あらかじめメールで送ろうと話した。大野さんを迎えてお話しいただく機会を、自分・たちにとって、何としてもこれまでのスタンスと今後の運動の方向性を確認する機会としたいという思いからである。大野論文への疑問点を大きく要約したものは、以下であった。

大野光明さんへの「問い」

１、「社会の「軍事化」」という認識は、運動に携わってきた大野さんの「戦後７０年」に対する一つの認識の仕方であり、そういいたい気持ちはわかる。問題は、「これら接続する運動の蓄積の上に、安保法制反対運動があることを確認しておく」というところである。それは大野さんの願望ではないのか。「そうあればいいな」と大野さんが思っていても、実際に運動状況としてそうなっていないから、昨夏の「安保法制反対運動」が「安保実態」に対する闘い＝「安保体制打倒運動」にならなかったのではないか。

２、大野論文は、前半が「日本社会の「軍事化」」という「戦後７０年」に対する認識、後半が「空間の占拠」という戦術が硬直した「主催者」（＝この場合「総がかり行動」とシールズに代表される）の在り方を超えてダイナミズムを生み出しているという闘争現場の描写という二段構えになっている。

　つまり、前半の「認識」の上に立って「戦略」を立てるべきであるという論の立て方でありながら、後半では「戦略」をどのように立てたのか、立て方は正しかったのかを語らずに、現場の描写から「占拠」という戦術が開く可能性について語られている　―　このように前半と後半がちぐはぐな印象を受けるのだがどうか。

３、ちぐはぐだと思うのはなぜか。「認識」の上に立った戦略の話と「現場」での話の間に、本来ならば運動の「組み立て」の話があり、それが両者を繋ぐはずなのだが、その話がすっぽり抜け落ちているからではないか。「総がかり」という今回の運動の組み立ては、「戦後７０年」に対する認識の違いはさて置き、とにかく新安保法制反対の一点でのみ共同歩調をとるという、いわば「安保実態」に対するスタンスの違いを問わない運動の立て方であり、逆に言えば違いを出させない＝認識の違いを認め合いそれをすり合わせる作業をあらかじめ封じた運動の立て方ではなかったか。だから、「主催者」の枠内からはみ出ることができなかった。ブツブツ言う人はいても、息苦しさを感じる人がいても、ゼネラルアッセンブリーは起こり得なかった。酒井隆史さんは、戦略からの戦術の自立が「問い」を拓き運動を豊かなものにするといっている。（「戦術しかない／戦略しかない―「問い」を開く黒い塊（ブラックブロック）」：2016年1月「10＋１web　site」参照）大野さんの論文の後半部分もそれに近い。その通りだと思うが、昨夏の運動の「組み立て方」そのもののところを問題にした文章は、ほとんど見かけない。大野さんの意見を聞きたい。

しかし、実際に大野さんへ私・たち主催者側から送ったメールは、核心的な問いを回避した、伝わりにくい表現になってしまった。メール内容は、Ｐ１８～Ｐ２０に掲載しているとおりである。

５．尋ねるべきだった「問い」

そのメールは、私・たちの見解を語ることはできるだけ控えつつ、大野さんの見解を最大限引き出そうとするあまり、尋ねるべき以下の三つの「問い」の論点がぼやけてしまった。そのこと

はすべて私・たちの側の問題であり、忸怩たる思いがある。

問い
　１、運動の組み立て方をどう見るのか
　２、戦術ではなく戦略のレベルでの問題をどうとらえるのか
　３、主催者の枠を超えられなかった集まった側の意識の問題をどうとらえるか

　しかし、これらの問いを明確に示して大野さんに正面から問うことができたわけではないが、当日の大野さんからの問題提起やその後の会場での私・たちとのやりとりから、私・たちと大野さんとのスタンスの異同は、ある程度明らかになったように思う。

①　大野さんの「安保法制反対運動」に対する違和感やいらだちは、私・たちも共有するものである。また、大野さんたちが、京丹後市の米軍の「Xバンドレーダー基地」反対運動や、swallowカフェでの取り組みを通じて得たものを手放さずに状況に向き合おうとする姿勢には、私・たちも共感を覚える。
②　しかし、その一方で、私・たちが「21世紀の安保闘争」といったある種の概念装置を持ち込むことで運動を現在の状況から次のステップへといかに進めるかといった発想を取ることに対して、大野さんは、運動の「マクロ」＝戦略をどう立て、「ミクロ」＝戦術をいかに多様に持つか、その間を繋ぐ運動の組み立てをどうするのかと問題を立てるのではなく、闘争の現場には、戦術が戦略を乗り越える可能性が垣間見える瞬間が必ずあるので、主催者側の硬直性を嘆くことよりも、現場で生まれる個別の小さな身振りや〈声〉に目を凝らしこだわっていきたいというスタンスで一貫していた。
　そのスタンスから、「『21世紀の安保闘争』などとあらかじめグランドデザインを描くことでいいのか」という疑問が提示され、「どのような政治勢力が始めた運動であれ、その闘争現場では、あらかじめ決められた闘争の枠組みを超え、「問い」の可能性を拓く戦術がある。そこに賭けたい」という矜持が語られたように思う。

６．自らに差し戻される三つの「問い」

　論議を大きな平面に据えようとする私・たちの大野さんへの「問い」は、このように議論の上でややすれ違う部分があった。しかし、議論の場でこちらが焦点化し切れなかったことで、消化不良にはなってしまったが、その場に真剣勝負の「問い」を持ち込もうとしたことの意義は、決して薄れるものではないと自負している。なぜなら、その「問い」に私・たち自身が運動する上で今後どう向き合うのかという意味で、その場を主催した私・たち自身にその「問い」が、しっかり差し戻されることになったのだから。
　そこで、大野さんをお迎えする企画を終えた現時点での、私・たちなりの「問い」に対するスタンスを最後に記しておきたい。

７．現時点での自分・たちの「問い」に対する自分・たちなりのスタンス

１、<u>運動の組み立て方をどうするのか</u>

　「総がかり」「シールズ」でない者は、「国会前」では彼ら「主催者」に従う「参加者」の位置に押し留められたのではないか。彼らは新「安保法制」が国会を通過しても敗北を認めず、今夏の参院選でも野党統一候補を立てて、議会内で反対勢力を伸ばそうとしている。しかし、それはそのまま「総がかり」運動の延長線上にあり、その運動の限界をより露わにするだけである。
　これを許せば、本来多様であるべき「安保体制」への批判のスタンスが、個別的自衛権や

自衛隊を合憲とするよう９条２項をなくし、１項のみにするといういわゆる「新９条論」へとすべて落とし込まれる危険性がある。個別的自衛権もすべて放棄するというスタンスを貫くことが「現実的でない」として排除されかねない。

そうなると、議会内左翼に「総がかり」より左がいなくなることになる。それ以上に怖いのは、議会外で左翼が居続けることも難しくなることである。私・たちは、運動の多様性にこそ価値があると考える。既成政党はもとより、自分たちが主導して野党統一候補を立てさせようと画策する市民運動の動きには、一線を画し、徹底的に批判し対抗していく。

新しい政治勢力をつくることは、容易なことではない。しかし、向こうの政治スケジュールにとらわれずに、列島上に点在する諸社会運動体を自分たちが動くことで横に繋ぐ＝〈横議〉―〈横行〉―〈横結〉へと一歩踏み出すことが、いま強く求められる。

２、「戦術」ではなく「戦略」のレベルをどうするのか

例えば、武藤一羊さんが唱えるように、戦後日本国家の三構成原理から、米国覇権主義原理と帝国継承原理を引き抜き、憲法・平和主義原理で国家を再構成することを目指すという「原理対原理の闘い」を実現するためにどうすべきか、大戦略を立てる必要がある。

「積極的平和主義」に基づく「集団的自衛権行使容認」であり、それに沿った「日米安保体制の双務化・グローバル化」である。「平和」という言葉を中身を伴わずに奪う、安倍一流の「ダブルスピーク」なのだが、アジア・太平洋戦争における加害責任を自覚しようとせず、脱植民地化回避システムがフル稼働する「戦後日本社会」にいては、安倍の議会内手続きの強引さと説明の不十分さを糾すこと以上には、なかなか反撃できない。

アジアの民衆と共に日本国家をアジアに開かれた憲法・平和主義の原理で再構成すべきだという議論への扉がすぐ隣にあるのに、実際には何重もの鍵かかかっており、そこを開けない。そのことを運動としてどのように突破するのか。なりふり構わず帝国継承原理を軸に再構成しようとする日本国家に対しては、「反日」のスタンスをより明確にする必要がある。

３、主催者の枠を超えられなかった集まった側の意識の限界をどうするのか

警察と主催者が話し合って決めた阻止線を突破できなかった群衆、主催者の思惑を超えてゼネラルアッセンブリーを提起できなかった群衆、そして、国会突入を果たせなかった群衆―もちろん必死の思いで時間を捻出して駆けつけた個々人がいることを否定はしない。しかしそこでは自分が自身の枠を超えて何者でもない名もなき一人になるという契機を、ほとんど生み出せなかった。そのことを否定的な意味を込めて「共和主義」（広瀬純）的な在り方であったと看破するスタンスに、自分・たちは共感を覚える。

自分では耐えられないほどの生の困難を、傍らにいる者への無自覚な水平暴力に転化するのではなく、上への暴力（＝暴れる力）へと昇華させることを可能にする「場」の持つ力が、そこには生まれなかったのではないか。

件のペルー人の「暴発」は、生の困難を抱える者たちの、いわば象徴的な出来事である。列島のあちこちで、自分・たちの身のまわりのそこここで、無防備で弱い者への水平暴力は日常的に起こり、「暴発」はこの列島上でずっと続いている。また、一人の人の精神の内部で、弱い自分への水平暴力が起こっている。激しい自責の念に苛まれ、内部での葛藤や分裂が常態化し、病に至ることが、いまや特別な人の特別なことではなくなっている。

この手なずけられない暴れる力＝〈暴力〉を、だめな自分を責め続ける精神の内側から外へ、抜き差しならない関係にある「身内」を痛めつける閉じたループの外へ、あるいは無防備な弱い存在を傷つけて留飲を下げようとする劣情のループの外へと引き出し、この列島を宰領する者たちの打倒へ、その先にある戦後日本国家に括り付けの脱植民地化回避システムの破壊へ、そして自分・たちの生の拡充へと向けるよう、筋道をつけることが、今最も必要ではないか。

刊行物案内

生・労働・運動ネット　富山

ＺＩＮＥ・２　2014・秋
〈フクシマへ〉折り返すことにむけて
ＺＩＮＥ・３　2015・春
さよなら　私の死者・たち――「困民丸」の小さな歩みから
ＺＩＮＥ・４　2015・夏
「敗戦 / 戦後 70 年」は私・たちの〈問い〉か
――「ラウンドテーブル・2014」での論議から
ＺＩＮＥ・６　2016・初夏
プロジェクト：「『熊谷ペルー人事件』
――そのペルー人とは〈誰〉か」のためのノート
ＺＩＮＥ・７　2016・夏
私・たちの来歴
――「日本の構成的解体」の想像力の自立を求めて――
ＺＩＮＥ・８　2016・夏
「階級」という問題の来歴：資料リスト　00 年代から現在
ＺＩＮＥ・９　2016・夏
2016 年　我田引用「ヤサグレたちの街頭」考
ＺＩＮＥ・10　2016・秋
NO WAR, BUT UNDERCLASS WAR ！
アンダークラスは〈横謀〉する
ON THE STREET ／ IN THE NIGHT @ TOYAMA

生・労働・運動ネット富山
25時行動委員会・富山

パンフ・1 ― 2016・秋

〒930-0009 富山市神通町３－５－３
TEL：076-441-7843　Fax：076-444-6093
URL：http://net-jammers.net/
E-mail：jammers@net-jammers.net